



令和3年1月21日

蒲刈中学校だより

発行：呉市立蒲刈中学校
文責：校長 柿林 浩彦

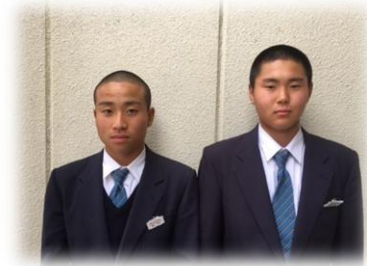
第29号

全国大会出場おめでとう

本校2年生 菅原 響くん、永原 洸太くんが第29回ヤングリーグ春季大会 全国大会に出場することになりました。下蒲刈のコメリ前と広の国道沿いの2カ所に横断幕が飾られていますので、すでにご存じの方も多いと思います。

2人は「府中広島'2000ヤング」という硬式野球のチームに所属し、主に休祝日に一生懸命練習を重ねてきました。11月の予選の大会を順調に勝ち抜き、おしくも決勝戦では3-5でヤングUG広島に負けましたが、見事2位となって全国大会への出場権を獲得しました。

コロナ禍の中、十分な練習ができない時期もあったようですが、自主練習もしながら実力をつけてきました。全国大会は、3月27日（土）から29日（月）の間、岡山県倉敷市のマスカットスタジアム等で行われる予定です。他のチームとの差などほとんどありません。もっている力をどのくらい発揮できるかどうか勝敗を大きく左右します。これからも自分自身をしっかり鍛え、悔いの残らない取組を期待しています。力を出し切るよう、頑張れ！



菅原響くん、永原洸太くん



フェンス設置工事にご協力をお願いします。

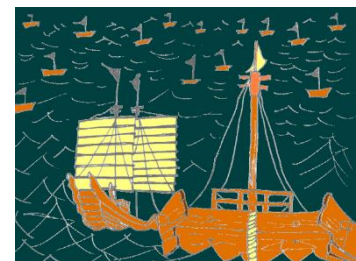
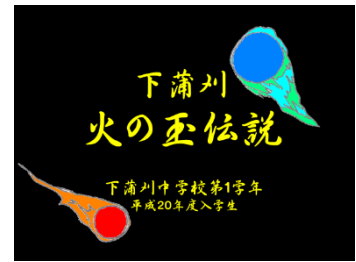
年末から3月末まで、中学校のブロック塀をフェンスに変える工事を行っています。工事のためブロック塀の周辺にあったサクランボができる桜の木などは伐採しましたが、正門横の大きなフェニックスはそのまま残ります。工事中に太い根が見られたので、思わず撮影しました。工事中はご迷惑をおかけするかもしれませんが、何卒ご理解ご協力をお願いいたします。



下蒲刈 火の玉伝説

下蒲刈中学校は令和2年3月31日をもって閉校しました。その後、校舎内の不要な物品は処分されましたが、正面玄関から2階に上がる階段の踊り場に飾っていたスタンドグラスは、今も蒲刈中学校の踊り場に場所を移して光り輝いています。

下蒲刈中学校の校舎にはいくつもの大作がありました。このスタンドグラスは残したいと考え、思い出の一品として蒲刈中学校に飾っています。飾るだけでなく、この作品のルーツを知りたいと思い、当時の先生に聞いてみました。スタンドグラスを制作することになったのは、平成20年度の入学生で当時の1年A組の生徒が、総合的な学習の時間に地域学習の一環として、下蒲刈の地域の方々から地域に残る昔話や伝説などを聞き取り、生徒たちが想像を膨らませて「下蒲刈火の玉伝説」というストーリーを考えたとのことです。また、文化祭では、生徒たちがパソコンで描いたイラストをバックに、朗読劇まで行ったそうです。照明や効果音、音楽なども工夫し、保護者や地域の方々にも好評で、地域の文化祭でも再演されたそうです。そして、当時の椋本 繁樹 校長先生（第16代校長）もこの話をとても気に入られて、スタンドグラスにして飾ることになったそうです。このストーリーは次のような内容ですが、地域を愛する気持ちがとても伝わってきます。今後も地域を愛する生徒を育てることの大切さを改めて感じ、気が引き締まる思いになりました。



「下蒲刈 火の玉伝説」(朗読劇の台本から)

「下蒲刈。私たちの暮らす下蒲刈。この下蒲刈島には、火の玉がよく現れます。あなたは、この美しく不思議な火の玉を見たことがありますか？一つは赤い火の玉。もう一つは青い火の玉。怪しくも美しく光るこの2つの火の玉。しかし、恐れることはありません。赤い火の玉は、天狗の魂。青い火の玉は、多賀谷の大將。この2つの火の玉は、私たちを守ってくれているのです。」



「2つの火の玉の伝説は、時代をこれから400年前までさかのぼります。400年前。この下蒲刈の地には多賀谷水軍が陣を構えており、天神鼻に今も城跡を残す丸山城は、その本拠地でした。昔から、青い海と緑に囲まれたこの恵まれた島であったはずのこの地は、その時代は、今からは想像できないほどに、荒れ果てていました。それは、この美しく恵まれたこの島を、我がものにしたいという天狗と多賀谷水軍の醜い争いによって、荒らされてしまっていたのです。実りが多く取れるはずの田や畑は、戦いによって荒らされ、ほんの少しの作物しか育たず、漁に出れば常に豊漁と言われたこの海にも、戦いによって壊された船では海にでることすらできませんでした。」

「もう、下蒲刈の地を守ることよりも、多賀谷水軍と天狗の両者にとっては、どちらの力が強いかを相手に知らしめることのほうが、この長い戦いの目的になっていたのかもしれませんが。無益な戦いであることを知っていたのは、下蒲刈に暮らす人々でした。天狗の影におびえて暮らし、傍若無人の多賀谷水軍に逆らわないように暮らし、どちらに逆らうこともできず、息を潜めて生活するのが精一杯でした。」

「その夜、丸山城から見渡す瀬戸の海は月の光に照らされきらきらと光っていました。夜も更けた頃、多賀谷の大將は、城に一人、月に光る海を見つめていました。この世の中で最も強い男であること、それが今の彼の最も大切なことでした。昨日の戦いも、天狗と一騎打ちに持ち込むところまで追い詰めながらも、ひらりとかわされ、大將の力を見せつけることができませんでした。『いまいましい、天狗め。次こそは決着をつけてやる。』多賀谷の大將がつぶやいた、そのとき。ばさばさと大きな羽の音を立てて、城の天守閣に天狗があらわれました。『いまいましい？ それは私のことか。』『この城に一人で現れるとは、たいした度胸だな。ここには私の配下のものが大勢いるのを忘れたのか。』天狗はにやりと笑いました。『お前は、やはりたいしたことのない男だ。自分一人では何もできないのだ。私とお前とどちらが強いかを、わざわざ一対一で戦うために、ここまで来てやったというのに。』大將は天狗をにらみつけました。

『昨日の一騎打ちを逃げたのは、お前の方ではないか。私はいつでもうけてたつぞ。』天狗はひらりと城の屋根に飛び移りました。『ここで勝負だ！多賀谷の大將。あがってこい。』『望むところだ！』大將は柱を伝って屋根に上がりました。2人は静かに刀を抜きました。『いざ、勝負だ！』

月夜の丸山城には、2人の戦いの音だけが響きました。大將が切り込むと、天狗はひらりとかわし、天狗が打ち込むと、大將がそれを受け流し、2人の戦いは夜通し続きました。静かな夜でした。聞こえるのは、天狗と大將の交わらせる刃の音。2人の息づかい。そして、波の音。何十回、何百回、何千回、刃の交わる音が響き、そして最後にもう一度。2人の刃が火花を散らし、もう2度と分かれることがないぐらい激しくぶつかりあいました。そのとき、2人は不思議な感覚に襲われました。この戦いは、このまま決して終わらない。戦いの中で、2人は幾度となく、感じていたのです。決して刃の届かないところまで飛んでいかない天狗。決して配下の者を呼ぶような音を立てない大將。それは、相手を認め合っているからこそ、2人だけの勝負だということ。これは、本当の敵との戦いではないということ。お互いに、本当の敵ではなく、お互いの力の素晴らしさを知り、だからこそ、互いの力をもっと知りたい、そして互いにたたえ合うような気持ちすら生まれていることに気づいたのでした。『天狗よ。私はお前の強さが本物だということに、心から感動している。』『多賀谷の大將よ。今、私もそれを言おうとしたところだ。私はお前の強さを、そしてこうして戦えることを誇りに思う。』目を合わせたままだった2人は、どちらからともなく、笑い出しました。

『フハハハハハハ・・・』 『ハハハハハハ・・・』「2人の笑い声が、城中に響き渡ると、城にいた多賀谷のものたちは、驚いて、屋根が見える場所まで飛び出しました。中にはあわてふためき、弓矢を構えるものまでいました。大將は言いました。『みななもの、よく聞け。長い戦いは終わりだ。天狗よ。さあ、いざともに手を取り合い、この下蒲刈を栄える地にしようではないか。』天狗も言いました。『多賀谷のものたちよ。お前たちの大將の強さはすばらしい。この強さと、私の強さがあわされれば、何も恐れるものなどないわ。』月夜に照らされた2人をたたえるように、多賀谷のものたちから歓声が起きました。下蒲刈はその日から穏やかな毎日が始まったのでした。」「下蒲刈島には四季折々に美しい花々が咲き乱れ、大地からは豊かな実りが、そして海からも多くの恵みがもたらされました。下蒲刈の自然にはぐくまれ、子どもたちもすくすくと成長し、いくつもの歳月が流れようとしていました。あの、戦いに明け暮れた日々がウソのように感じられるような穏やかな日々でした。天狗は、小高い丘から下蒲刈の人々を優しく見守りました。何かあったら一番に飛んでかけつけ、村人を守りました。多賀谷の衆は、船を先導し、この一帯の海を行き交う船の安全を守っていました。そのため、この地を行き交う船は、多賀谷水軍に敬意を示し、必ず挨拶をするのでした。豊かな下蒲刈とともに、多賀谷の名声も瀬戸内に知れ渡ったのでした。ときには、朝鮮からの使者が訪れることもありました。多賀谷の大將は、たくみに朝鮮の言葉を操り、朝鮮通信使をもてなしました。天狗は、どんなことにも動じない多賀谷の大將の堂々とした振る舞いを誇りに思い、大將は、どんなときも村人たちを見守ってくれる天狗に感謝していました。」



「ある日のことでした。この穏やかな暮らしを一変することが起きたのでした。この豊かな下蒲刈を我がものにしようとする巨大な勢力が、突然襲ってきたのでした。敵は数万。対する多賀谷の軍勢は数千。しかし、多賀谷の大將はひるみませんでした。」



守るものがあることが、どんなに強いかわっていたからです。天狗とともに守ってきた下蒲刈を誰にも渡さない自信があったからです。戦いのための装束を身につけ、空を見上げたとき、天狗がそれに答えるかのように現れました。2人はうなずき合うと、船に向かいました。」「鉄壁の守りでした。多賀谷の民の心根にかなうものは何もありませんでした。七百艘もの櫓伝馬が一斉に海に繰り出し戦う姿は、息をのむほど素晴らしいものでした。驚いた敵は一目散に逃げ出しました。天狗が敵の大將をめざとく見つけ、その船を捕らえました。多賀谷の大將は、敵を殺すつもりはありませんでした。穏やかに話を進めました。下蒲刈の地は誰にも渡さないと。敵の大將が力なく頷くと、天狗は船を放し、敵の船は来た方へとこぎ出しました。その姿を見ながら、大將は天狗に言いました。『私は、お前との戦いで、学んだことがある。誰もがわかり合えるということだ。』

振り向いた大將が、天狗ににっこり笑いかけたそのとき…。振り返った敵が大將へと矢を射ったのでした。矢は大將の背中に向かってまっすぐに飛んで来ました。『大將！』天狗の悲鳴にも似た声が響きます。どんなに素早く動くことができる天狗も、その矢を防ぐことができませんでした。矢は大將を貫きました。『大將！』『大將！』『大將どの！』天狗は吠えました。下蒲刈の島が震えるほどの声で大將を呼びました。しかし、大將は目を開けません。どんなに揺り動かしても、大將は目を開けません。天狗の怒りに満ちた叫びに、敵は一目散に逃げていきました。

許せない。許せない。でも、今は大將の命が先だ。天狗は、大將の胸に耳を押し当てました。心の臓の鼓動が、ほんのかすかに、本当にほんのかすかに感じられました。天狗は言いました。『天に咲く花は、心の臓を強くする力があると聞く。』大將の船を囲むように集まってきた船に乗る多賀谷のものたちに向かって言いました。『大將は私が助ける。必ず助ける。天に咲く花を私は必ず持ち帰る。それまで、それまで大將を頼む。』言い終わるやいなや、天狗は天に向かって飛び立ちました。

高く高く、天に向かって、天に咲く花めざして、まっすぐにまっすぐに飛んでいきました。ひとときも休まず天狗は翼を動かしました。初めて自分を認めた人間のために。天に向かって天狗は飛び続けました。初めて自分が認めた人間のために。天狗は決してあきらめませんでした。大將の命を助けるために。目が太陽の光でかすんでも、天狗はまっすぐに天を見つめました。肌が太陽の熱でぼろぼろになっても、天狗は弱音を吐きませんでした。翼が太陽の炎で焼けこげても、天狗は飛び続けました。3日3晩飛び続けたとき、天を守る門が目の前に現れました。大きな門でした。とても一人の力では開きそうにない門でした。門の前に飛び降りた天狗



は、門をたたきました。そのとき、天から美しい声がやさしく天狗に問いかけました。『門をたたくものよ。お前はなぜ門をたたくの。』天狗は答えました。『天に咲く花を求めてきたのだ。この門を開けてくれ。』『なぜ、天に咲く花を求める。』『わたしの大切な友を助けるためだ。この命なげうってでも、守りたい友の命のためだ。』『天に咲く花はここにある。ただし、その友のための花は一つしかない。そなたにそれが見極められるか？』一瞬の間が開きました。一瞬うなだれたかのように見えた天狗は、頭を上げ、まっすぐな瞳で、そして自信を持って答えました。『私にはわかる。その花が。』門は静かに開きました。」「天狗は、花が咲き乱れる天の地の中を見渡しました。色とりどりの花が、ひとつひとつその美しさを競っているかのようでした。天狗にはわかっていたのでした。その花は、大きなものではありません。その花は、決してきらびやかではありません。しかしその凛とした存在感で、正直な生き方をする大將の心のような花、それが天狗の求めていた花なのです。天狗はその花を見つめ、そっと手にとりました。『シュンラン。あなたの求めている花は、シュンランですね。』天の声は言いました。『急ぎなさい。あなたなら、間に合います。あなたの大切な友のために、急ぐのです。』『ありがとうございます。感謝します。』天狗は飛び立ちました。

一直線に天から下蒲刈へと自分の身を守ることすら忘れて、落ちる速さよりも速く飛びました。もう、心配ない。大將待っているよ。俺が助けてやる。天狗の心もまっすぐに大將へと向かっていました。」「お城では、多賀谷の衆が天狗を待ちわびていました。それだけではありません。下蒲刈の村人たちも天狗を待ちわびていました。下蒲刈の人々はみんな天を見上げ、天狗の姿を探しました。2日たち、3日たち、そして4日目の朝でした。大きな光が下蒲刈を包み込みました。それは、流れ星よりも速い天狗の姿でした。まっすぐに城へと向かう天狗、その手にはしっかりとシュンランが握りしめられていました。配下のものたちは天狗にシュンランを受け取ると、急いですりつぶし、天狗が抱きかかえた大將の口へと運びました。抱きかかえられた大將。それを見守る天狗と多賀谷のものたち。大將をかたずを飲んで見つめました。そのときです。大將のまぶたがかすかに動きました。『大將！』『大將！』『大將どの！』その声に応えるかのように、大將は目をゆっくりと開けました。天狗の目から涙がこぼれました。大將は、あたりを見回し、そして真っ黒に焼けこげた姿で自分を抱きしめて泣いている天狗に驚いて言いました。『おお、天狗よ。どうしたのだ。何を泣いている？』（どよめきと歓声がわき上がる。『大將！』『大將！』『大將どの！』

(お祭りの賑やかな歓声。子どもたちのはしゃぐ声。太鼓の音。下蒲刈音頭もかすかに聞こえてくる。)

「今日はお祭り。戦いに勝った喜び。大將が目覚めた喜び。天狗とともに多賀谷の衆も村人たちも一緒になって祝っています。こうして、多賀谷水軍と天狗は手をとりあって、なおいっそう下蒲刈の地を栄えあるものにしていったのでした。月日が流れ、年取った大將がこの世から旅立ちました。そして天高く飛び回る青い火の玉が現れるようになりました。天狗は、これまでと変わらず下蒲刈の民を守り続けました。大將が亡くなってから、天狗はあまり人に姿を見せたがらなくなったのですが、時折見かけられた天狗の姿は、決して寂しそうではありませんでした。下蒲刈の人たちを、いつもと変わらず優しく笑みを浮かべて見守っていました。そして、400年たった今、青い火の玉は、赤い火の玉とともに、この地を見守るかのように現れるのです。そう、それは、多賀谷の大將と天狗の魂に違いないのです。」

